

復活節第主3日 説教 「日々、新たにされて」要旨

牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2022年5月1日

イザヤ書 58:6~10

おはようございます。先週は、礼拝に引き続いての定期教会総会となり、皆さまのご協力によって短時間で終えられたとはいえ、さぞお疲れであったと思います。そして、新旧役員は、さらにその後もありましたので、さらにお疲れであったと思います。ですから、教会の皆さまには是非そうした役員のご苦勞を思い起こしながら、この後の役員任職式に臨んでいただきたいと思います。また、役員 of 皆さまには、そうした教会の皆さまの祈りの中にあつてこそ、その働きが祝されたものとされることを覚えて、この後に臨んでいただきたいとも思います。それは、互いへの気遣いを大事にしているのが私たちであるからです。そこで、早速御言葉に聞いて参りたいと思いますが、ところで、この日の説教題を年間主題である「日々、新たにされて」とし、また、この日の聖書箇所として今年度の年間聖句から選んだのには理由がありました。一つには、総会直後だからということでもありますが、けれども、もう一つ、今年度の年間聖句である「あなたが呼べば主は答え、あなたが叫べば、『私はここにいる』と主は言われる」とあるこの御言葉、これこそが私たちの信仰の基盤でもあるからです。

信仰というものを一言で言うならば、それは、聖なるものを間近に感じること、触れること、そういうところから始まるものが信仰というものだということです。従って、この日の御言葉はそのことを端的に現しているわけで、ですから、この呼べば直ちに答えてくださる神様を実際に間近に感じていただきたいというのが私の願いです。ただし、それは、感じる事ができる方には是非どうぞということではありません。個人的に感じる感じないということではなく、皆さん全員に等しく分かち合っていたきたいということです。それは、基盤を共にするということつまり、信仰には、守るべきものがあり、それゆえ、そこには、一つの形、つまり、形式や型があ

る。そして、それゆえにまた、それを軽んじるころからは何も産み出されることはないからです。ですから、私たちがこの基盤となるものを共にし、重んじるためには、一つの枠組みに身を置く必要があるのですが、ただし、それは、形式主義に陥るということではありません。ここで先ず語られていること見れば、御言葉が信仰の形骸化、形式主義を戒めているのは明らかであり、けれども、このことはまた、逆から見れば、私たちは宗教的形式主義に陥りやすいということなのです。なぜなら、個人的な事柄にどうしても大きな価値を置いてしまうのが私たちであるからです。

そこで、この日の御言葉を見て分かることは、そうした傾向が特に強いのは、信仰の専門家、宗教的エリート層であるということです。つまり、枠組みへの拘りの強い人々にそうした傾向が強く見られるということです。ですから、そういう意味で、その端くれの一人として私も気を引き締めなければなりません。しかし、私だけが気を引き締めれば、それで物事すべてがうまく行くということではありません。なぜなら、9節の御言葉は、ある特別な人々の、その個人的な体験として語られているものではないからです。そこで語られていることは、人々の共通体験であり、ですから、そこで重要なことは、「私は」といった個人的な事柄として御言葉に聞いていくのではなく、「私たち」という観点から御言葉に聞いていくということです。それゆえ、そこに差があつてはならないわけです。ところが、本来、信仰の基盤を共にする神の民イスラエルにおいて、そこに違いが生じたわけで、冒頭に記されていることは、まさにそうした事態を示すものです。けれども、そうであるからこそ、御言葉は、私たちの信仰の基盤が何かを明確にしようとしているのです。それが、年間聖句である9節の御言葉でもありますが、しかし、それにも関わらず、神の民の中で明かな信仰的錯誤が生

じたわけです。そして、そこにはっきりとした理由がありました。8節に「そうすれば、あなたの光は曙のように射出で、あなたの傷は速やかに癒やされる」とあるように、大きな傷を負っていたのがイスラエルの人々であったからです。

ところで、イザヤ書の56章から66章にかけての御言葉は、イザヤという一人の預言者の手によって記されたものではなく、様々な人々の手を通して一つの書物にまとめられたものです。そこで学者はこの、一つにまとめた集団を第三イザヤと呼ぶのですが、その背景として見ることでできるものは、バビロン捕囚から解放され、エルサレムに帰還した人々の姿です。ところが、あれほど恋い焦がれた故郷に戻ってみて、人々がそこで見たものは荒廃した故国の姿でありました。それゆえ、人々にとっての喫緊の課題は故国再建です。なかでも神殿の再建がその喫緊の課題なったわけですが、なぜなら、礼拝こそが彼らの生活の中心であったからです。しかし、身一つで戻らざるを得なかった彼らにとって、それは簡単なことではありませんでした。生活か、それとも信仰かと、この二つに一つを迫られるような状況に置かれたのが帰還後のイスラエルの民でした。しかし、彼らは、私たちのように信仰か、それとも生活かなどといった具合に信仰を分けて捉えることはありません。それは、生活のすべてが信仰であったからです。ですから、ここに記されていることは、そういう意味では、私たちの感覚からは少しズレているようにも思います。けれども、そこで一つ言えることは、信仰の基盤は、信仰と生活とを分けて考えるところからは生じないし、見えては来ないということです。

それゆえ、ここで生じているような事態を招いた責任は、その宗教的指導者にあるのは間違いありません。彼らにはそれを是正する責任があったからです。けれども、このような事態を招いたのは、彼らが神殿再建を果たすためにその職務に、ある意味で忠実であろうとしたからです。ただし、その結果、すべての人々が傷を負うことになった、まさに、そこに信仰と生活を分けずにいることの現実が如実に現されているとも言えるのでし

よう。従って、この歪みは何としても是正しなければならぬわけですが、問題は、それを誰がやるかということです。そこで、私たちが思い起こすことは、ルカによる福音書10章にある、皆さんよくご存知の「善きサマリア人」の譬えです。それは、傷ついた人の隣人とは一体誰なのかということがそのテーマでもあるからです。では、そこで瀕死の重傷を負った人を助けたのは誰であったのか、それは、祭司でもなく、またレビ人でもない、いわゆる宗教的エリートではありませんでした。では、自分こそが神の民であると自認する人々が瀕死の重傷を負った人を助けたのかというと、どうやらそうでもありません。なぜなら、そこで、イエス様が口にしたのはサマリア人であったからです。

サマリア人はユダヤの人々からすれば、宗教的に一段も二段も低く見なされている人々でありました。それは、同じ神様を信じながらも、彼らとユダヤ人の暮らし方には明らかな違いがあったからです。つまり、基盤となるものに大きな違いがあったということです。そして、そのサマリア人のこと忌み嫌う律法学者に向かって、イエス様が語ったことは、彼らが真実を求めながらも形式主義に陥っているということでした。ですから、一つの形に拘るが余り、信仰共同体において大きな歪みを生じさせているという点では、帰還後のイスラエルについても同じことが当てはまります。それゆえ、義を見てせざるは勇無きなり、イエス様が「行って、あなたも同じようにしなさい」と仰るように、交わりにおける歪みに気がついたのなら、歪みを是正することが一番の課題となるのでしょうか。しかし、それにしても、私たちがこの「善きサマリア人の譬え」をこれまで繰り返し何度も聞いてきたにもかかわらず、この善きサマリア人と同じようにできないのはどうしてなのでしょう。

そこで気がつかされることは、私たちが自らの信仰を語る場合、自分を棚に上げて語ることがあるということです。

「誰誰の信仰は素晴らしい、けれども、それに対して自分の信仰はなんと貧しくて小さいのか」などと語るのはそのためです。つまり、先ほど申しました、生活

か、それとも信仰か、という形で信仰を捉えてしまうのは、まさに、信仰を自分事として捉えていないからだということです。しかし、その一方で、私たちの中にはそうではない人も確かにいるのです。ですから、私たちが信仰を語る上でそうした人を引き合いに出すのは、私たちの自信のなさが私たちをしてそうさせているということです。そして、それは、私たちがある意味で聖書が求めるところを忠実に理解しているからです。分かっているから、いや、分かりすぎるから、私たちが信仰を自分事として語るができない。けれども、分かっているからこそ、そこでまた、言い訳めいた言葉が口についてしまうのです。しかも、そのような時の私たちは実に饒舌です。ですから、そのような時、私たちの信仰は形式主義に陥っているとも言えるのでしょうか。では、どうすれば、そうしたところから私たちは抜け出すことができるのでしょうか。私は、その答えがこのイザヤ書の御言葉にあると思うのです。

形式主義に陥ったとき、そこで明らかにされることは責任の回避です。誰かがやるだろうというこの思いです。それは、私たちがものが分かっているからではなく、物事をよく弁えているからです。だから、触らぬ神にたたりなし、というところから物事を見てしまうわけです。しかし、そうした私たち個々の問題を、こうせねば、こうあらねばという形で本当に克服することができるのでしょうか。私はそれは難しいように思います。そして、そもそものところで言えば、そう考えることは聖書のメッセージからは外れているとも思うのです。なぜなら、神様が私たち人間にもしそれを本当に期待しているのなら、イエス様が十字架につく必要はなかったからです。このことはつまり、明確な意思をしっかりと持てば、その課題は必ず克服できるなどとは聖書は言っていないということです。それは、私たちにとって十字架は、その責任を追及するためのものではないからです。十字架は神様の赦しに与るためのものであり、そもそものところで言えば、赦しそのものでしかありません。しかし、赦されているということは、私たちが責任の伴うあらゆる思い煩いか

ら、そのすべてを解放するためのものでもありません。聖書において責任というもの神様への応答というところで捉えられているように、つまりは、それが、私たちの生活のすべてであるということです。ですから、私たちが信仰的に形式主義に陥ってしまうのは、この求められていることに答えよう、答えなければ、と私たちが思い込んでいるからです。けれども、十字架が明らかにすることは、責任、罪という言葉聞いて、条件反射のように神様の求めに反応することではありません。それゆえ、応答と反応の違いを明確に意識することが大事になってくるわけですが、従って、このイザヤ書の御言葉は、まさにそういう私たちに語りかけられている御言葉であるということです。

この一年間を通し、私たちが繰り返し聞いていくべき御言葉が、この「あなたが呼べば主は答え、あなたが叫べば、『私はここにいる』と主は言われる」との御言葉です。それは、私たちが主の御前においてこのことを受け入れたからです。従って、そういう意味で、私たちには、この御言葉に繰り返し聞いていく責任があるのです。ただし、その場合の責任の取り方は、この御言葉を互いに押しつけ合うことではありません。聞いていくべきは個人ではなく、私たち藤沢教会のすべてであり、だから、私たちはこの御言葉にあるように神様を間近に思うことができるのです。つまり、ここで問われていることは、誰がそれをしているか、できているかということではありません。私たちが私たちとして生きているか、この一年私たちに問われていることはこのことなのです。

責任＝神様への応答であるように、それゆえ、そこで問われることは私たちの明確な意思でもあるのでしょうか。なぜなら、応答は条件反射のようなものではないからです。けれども、信仰と生活との間に切れ目がないと言うことは、長く続けている間には無意識のうちに反応してしまうことがあるということです。ですから、信仰の形骸化、形式主義はそういう切れ目のなさ、ある意味での私たちの真面目さ、そういうところから気がつかない内に生じるものだということです。

従って、それを避けるためには、私たちは日々新たにされる必要があります、そして、それが私たちが私たちとして生きているということでもあるのです。しかし、日々、新たにされつつも、信仰と生活との間に切れ目がない以上、そこにはまた新たな課題が日々現れるということです。病があり、苦しみがあり、悲しみがある、さらには、愛する者との別れがある、私たちが私たちとして生きるということは、私たちが新たにされる一方で、私たちを衰えさせる力も同時に働いているということです。それゆえ、日々新たにされることがなければ、どうなってしまうのかとも思うのですが、ただ、そのために私たちが軛を負ってくださっているのが私たちのイエス様でもあるのです。それは、病を負う者、虐げられた者、苦しみや悲しみを抱える者、そのすべてを癒やし、慰め、励まされたのが私たちのイエス様であるからです。

そして、そこで大事なことはイエス様が私たち一人ひとりを含めて、「私たち」と呼んでくださっているということです。つまり、私たちが私たちであるということは、イエス様を離れては成り立たないということです。従って、病も、あらゆるこの世の苦しみも、私たちにっては個人的なことではありません。いいものも悪いものも、そのすべてがイエス様が「私たち」と仰る、その私たちのものであり、そして、そのすべてをイエス様は共に担い、そして、その交わりの中に私たちを置いてくださっているのです。ですから、冒頭で、先週の総会について少し触れ、そこで皆さんが感じたであろう疲れについて申し上げましたが、これこそが私たちが私たちとして一緒に生きているということです。それゆえ、その私たちがイエス様と共にいてくださっています。しかし、イザヤ書が様々な歪みを明らかにしているように、その中でも、実に様々な問題が起こります。そして、その中で起こった最も大きなことはイエス様の十字架の出来事でもあります。ただ、この軛はイエス様にも担いきれないとそう思わせるものでもありました。

では、イエス様はそこで何をなさったのでしょうか。「アッバ、父よ」と神様

に向かってこう呼びかけられたのです。そして、イエス様のその姿は、イザヤ書58:9で語られているそのままをでもありました。ですから、どうすることもできない時、私たちはすぐに動き出すべきではありません。神様に向かって『あなた』と、「アッバ、父よ」と呼びかけ、自分がどこに生きているかを確かめることが大事なのであって、互いの不作為、過ちを責任という便利な言葉を用いて追及することではありません。それは、私たちがそのイエス様と共にいますということは、私たちはこれ以上ない平安の中に置かれているということだからです。ですから、これはおかしな言い方になりませんが、このことはつまり、私たちは安心して苦しみ、安心して悩み、安心して悲しむことができるということです。

病も、試練も、困難も、悲しみも、私たちはそうした否定的な出来事のできる限り自分から遠ざけようとするものです。つまり、そうした難しい問題を、わたしたちは「あなたの事柄」として処理し、その人だけに押しつけることがあるということです。しかし、このあなたの事柄として片付けられることのすべては、イエス様に「私たち」と言われている私たちにっては、すべてが「私の事柄」であり、まただから、私たちは私たちであることに安心し、暮らすことができるのです。なぜなら、私たちはそこにイエス様を間近に思うことが赦されているからです。ですから、そのために私たちが何よりも大切にすべきものは主の日の礼拝です。そして、私たちがこの主の日の礼拝を強いられた形ではなく、素直に喜びをもって受け止めることができるのは、繰り返し繰り返し、そこでイエス様が共にいますことを知らされるからです。ですから、礼拝は私たちにあって、私たちが私たちであるためになくしてはならないものです。それゆえ、私が私であるためにも、イエス様と共に御言葉に聞き、祈り、神様を礼拝するこの主の日の礼拝に集い続けたいと思うのです。ですから、そういう意味で、私たちが私たちであるためにも、礼拝と祈りを生活の中心に置き、この一年をご一緒に過ごして参りたいと思います。祈りましょう。